

ずいそう



ベルリンの衝撃 2 感

常 田 賢 一



2014年9月下旬に、第10回IGS国際会議(International Conference on Geosynthetics)に参加し、ベルリンに行く機会を得た。会議の状況などは、いずれIGS日本支部から報告があると思われるので、ここでは当方が初めて訪問したベルリンで強烈に感じた印象から、私見を交えた2つを吐露する。

まず、興味があつたのはベルリンの壁であり、1961年～1989年の28年間設置された壁の崩壊から25年経過した現在の姿である。全長155kmとされる壁のうち、現在残っている箇所は限られている。観光地としても残っているEast Side Gallery(前者)とGedenkstätte Berliner Mauer(後者)に行ったが、壁のごく一部であれば、ポツダム広場など、他でも散見された。

前者は延長1kmほどあり、ほぼ1列のRCのL型構造の壁が残り、その名の通り、壁の両面は公認のストリートアートとして描画されている(写真—1参照)。いわゆる“風刺落書き”と見え、壁に内在する真の意味が隠されているようで、後者ほどの感慨は湧かなかった。

他方、後者は記念碑・ゾーンとして、整然と保存されている感慨深い場所である。写真—2は二重の壁、監視塔が保存されている区間であり、当時の様子が覗かれた。25mほどの間隔で設置された2列の壁の構造は、西側がRCのL型構造、東側がコンクリートパネルの段積み構造であり、いずれもプレキャストであるが、異なる理由に想像が廻った。特に、L型構造の部材は概ね幅1m、高さ2.5m、壁厚20cmであり、壁の上端は直径40cmほどのコンクリート円筒管が

被されており、表現が適切ではないが、いわゆるネズミ返しと思われた。西側の壁の外側の面は鉄筋が露出している(写真—3)が、いつ、どのように、どのような理由で、そのような状態になったのかに想像が廻った。さらに、地表面には西側に抜け出すためのトンネルのルートが表示されており、その長さからは必死な思いが伝わる気がした。

次に、市内で目立つ落書きである。良い意味では、ストリートアートと呼ばれているが、民間の建物のそれは兎も角も、公共空間、公共物の至る所での落書きを見ると、アートの域を逸脱している印象を受け、衝撃であるとともに、心が痛んだ。写真—4は、鉄道橋の鋼主桁の落書きである。また、写真—5はSpree川に架かるOberbaum橋であり、遠景は見事な土木遺産であるが、人が往来する歩道部の柱は落書きで無残な姿である(写真—6)。さらに、写真—7は建設中の鉄道線に関する新設の橋脚であるが、鉄道線の供用前にも拘わらず、無神経な落書きにより橋脚の設計者、施工者の心が踏み躪られている。

我が国でも、意味不明な字体による落書きが散見されるが、土木構造物、遺産に直接落書きされることは無いと認識していただけない、ベルリン市内のそれは理解ができない。表現の自由、反骨の精神、自己の顕示、ベルリンの地域性、ドイツの国民性なのかは不明だが、公共に対する節度、優れたものへの尊敬の念は、いくらグローバル化の時代でも普遍であるべきと感じた次第である。

——ときだ けんいち 大阪大学大学院 教授——



写真—1 ギャラリーの壁：東側から



写真—2 二重の壁と監視塔：西側から



写真—3 西側の壁：手前は壁の表示棒



写真—4 無残な鉄道橋の桁



写真—5 風格のある遠景



写真—6 無残な近景



写真—7 無残な新設の橋脚